

都市と国家についての原理的一考察

友 岡 学

いくたりかのモスクワ大学の若い経済学者たちは、価値法則や帝国主義の問題について語りあった外国人の一教授に向かって、ある日、こうたずねた。「あなたがたはなぜそんな公式を用いるのですか？ われわれはやむなくこの公式を用いているが、あなたがたにはそんな必要はないはずだ！」—G. マルチネ『五つの共産主義』上巻, 151～152ページ, 熊田亨訳, 岩波新書。

まえがき

この頃、市場の評判ががた落ちである。老いも若きも、市場に関する限りは、世代間の断絶を乗り越えて、手を結び合っているようだ。思えば、もともと、老いた人びとは絶対的不信を、若い人びとは絶対的信頼を、その市場に寄せていたのだった。前者は「見える手」を、後者は「見えない手」を、それぞれ神の手とみなしていた。それがどうしてこうなったのであろうか。

老いた人びとは、「社会主義」は「見える手」をもつ地上の神によって上手に導かれると主張し、若い人びとは、それは失敗するに決まっていると主張した。この面では、若い人びとの主張に軍配があがりそうな気配が見られ、老いた人びとは周章狼狽気味であった。ところが、他方で、「資本主義」は「見えない手」をもつ、天上の神によって上手に導かれると若い人びとが主張し、老いた人びとはそれでは失敗間違いなしと主張した。この面では、老いた人びとの方に軍配が上りそうな気配が最近になって起り、老いた人びとは失なわれかかった威信を建て直す絶好の機会だと喜んでいる。

だが、老いた人びとが安心するのはまだ早いだろう。「資本主義」が、たとえ「見える手」をもつ神の力に頼らねばならないとしても、そのことは、「社会主義」が「見えない手」をもつ神の力を全くからず済むことを意味するものではなかろうからである。せいぜい、次のようにいうことができるだけだろう。「計画経済の効用を絶対視するのが誤りであるように、資本主義の市場メカニズムの効用を理想化するのも誤りであろう。」

(「国際経済の基本問題」というテーマで行なわれた第8回国際経済研究会における報告中村氏「社会主義貿易国家独占の問題」に対する鈴木重靖のコメント。「世界経済評論」1973. 3, 42ページ。)

わたしの考えは「受益者負担原則考」(九州経済学会「経済・経営研究」第10集, 1972)で述べておいた。かいつまんで紹介すると、歴史的に見て、人びとは脅迫システムに代えるに交換システム(その空間的表現が市場)を選択して来たが、交換システムは、匙を投げられるにはまだまだ不十分にしか活躍の舞台を与えられていないということだ。「市場」の失敗を説いて「計画」にすがろうとするのは、「民主主義」をあきらめて王政復古に向うのと同じようなものだ。わたしは計画をむげにしりぞけるのではない。計画が有効なのは、市場を追放することによってではなく、むしろ市場を建設することによってである。

ここに市場と計画を持ち出したのは、わたしが今から論じようとしている都市と国家に、それぞれが対応する面があるからである。市場に飽いて計画を望むことは、都市を捨てて

国家を拾うことにつながる。しかし、それは殆んど自覚されていない。市場と計画は、また、「資本主義」と「社会主義」にそれぞれ対応するというかなりの広さの共通認識がある。その認識に乗れば、市場と計画を媒介に、都市と国家は「資本主義」と「社会主義」に対応することになる。

そのような対応を考慮しながら、都市と国家の関係を考えて見よう。都市論と国家論は、それぞれ、この頃おびただしく現われているけれども、わたしの見る所、都市論からは国家論が、国家論からは都市論が、それぞれ欠落している。この小論は、そういう状況についてのわたしの不満を解消するためのささやかな試みである。

1 「都市国家」という言葉にひそむ問題

都市と国家の関係を考えるとすれば、歴史の上で「都市国家」と呼ばれて来たものに触れないわけにはいかないだろう。「都市国家」は、どういうものに当てられた言葉であろうか。試みに『社会科学大事典』（鹿島出版会、1970）を引いて見よう。弓削達書が書いている。

「都市国家については今日必ずしも一般に認められた概念があるわけではないが、形態的には、城壁にかこまれた中心市とその中における神殿と市街の存在、城壁外における都市領域としての一般にあまり広くない農耕地の所有があげられ、機能的には政治的に独立した一国家である点があげられるであろう。このような都市国家は、一定の歴史的条件のもとで生まれたもので、エジプト、メソポタミア、インド、中国、ギリシア、ローマなど世界史上かなりひろくみられる。（後略）」

「都市国家」というからには、一定範囲の空間が都市であると同時に国家であることを、したがって、その空間内の住人は市民であると同時に国民であることを意味するであろう。弓削達の説明から受ける印象としては、そこでいわれている「都市国家」の住人は、国民と呼ばれるにはふさわしくても、市民と呼ばれるにはふさわしくないのではなかろうかという感じが否めない。いみじくも、羽仁五郎は『都市の論理』（勁草書房、1968）でいっている。

「東洋（上記弓削達の文章中のエジプト、メソポタミア、インド、中国がこれにふくまれる——友岡）に現われた都市は……外形上は都市にきわめて似ているのですが、都市ではないのです。……ぼくはそれを、市民のいない都市と云います。」（102ページ）

この文章も、実は論理的にはおかしい。しかし、今はそれは措いて、さし当り必要なことを指摘すると、東洋の都市らしい集住空間には市民がいないので、その集住空間は都市ではないということになろう。人びとが一定空間に集住しているのを指して都市と呼ぶなら、都市はどこにでも発見できそうである。

(1) 論理的なおかしさは、その文章を表現し直すと明らかになる。

「（東洋に現われた）都市は…（外形上は都市にきわめて似ているが、）都市ではない。それは、（市民のいない）都市である。」力点部分をつなぎ合わせると、「都市は都市ではない。都市は都市である。」正しくは、次のように書かれるべきであったろう。

「東洋に現われた、そして人びとによって都市と呼ばれているものは、外形上は都市にきわめて似ているけれども、都市ではない。なぜなら、それには市民がいらないからである。」

羽仁五郎は、更に、次のように書いている。

「市民によって建設された都市ということなので都市は、ギリシア都市が最初なのです。」（104ページ）（正しくは、次のように書かれるべきだろう。「市民によって建設された、したがって都市と云うことができる最初のものは古代ギリシアにあった。」）

要するに、形態とか外形に拠らずに都市を定義づけようとするわけであり、その方法は弓削達に優ると云ってよいであろう。羽仁五郎の考え方は、直ちに、マックス・ウェーバーを思い出させる。周知のように、ウェーバーは、『一般社会経済史要論』（黒正，青山訳，岩波書店，1955）で「固有の意味での都市 *Stadt* は西洋独特のもの」（下巻，185ページ）といっている。

ところで、都市と呼ぶにふさわしいものが、果して、古代ギリシアにあったのであろうか。別のいい方をすれば、ポリスは都市と呼ばれるにふさわしかったのであろうか。ウェーバーに拠ってみるだけで、疑念が湧くのを禁じえない。

「古代都市は中世のごとき生業政策をおこなわず、ただ軍事政策をおこなったにすぎぬ。」（同上，200ページ）「中世においては都市はツンフトから構成せられたが、古代においては都市は決してこういう性質をもたなかった。」（190ページ）もっとも古代都市は「一種の戦士ツンフトに発展していった。」（204ページ）「身分の平等化と自由の束縛の撤廃は、中世都市の発展の決定的傾向となった。……古代都市は、中世のそれと反対に、身分的不平等が強化する傾向を示している。」（203ページ）

こういう相違を前にしても、古代のそれと中世のそれとを、ともに都市と呼ぶことができるだろうか。わたしには、中世のそれと対照する限り、古代のそれは都市以外の別の言葉、端的に国家と呼ぶ方がふさわしく思われてならない。羽仁五郎も、「都市国家」という言葉を使うことに格別なめらいを感じていないらしい。そして、先に見たように、ポリスが最初の都市であったとしながらも、そのポリスの住人について、クウランジュに拠りながら、平気でこういうのである。

「古代都市においては個人的自由は存在し得なかった。市民の心身は国家に属するものとされていた。」（同上，131ページ）

心身ともに国家に属する人びとを市民と呼んでよいのだろうか。勿論、人びとが、めいめいの意志で、みずからの選択で、国家に属するというのであれば、おのずから話は別である。「個人的自由は存在し得なかった」のだから、彼らの心身が国家に属する仕方は、選択によったのではなく、強制によったのだ。強制によって国家に所属させられる人びとが市民であれば、市民は羽仁五郎によって「市民がいない」と云われた所にいることになるだろう。こういうことから、

「ナチスなりファシズムでもできないほどの個人の自由に対する統制、しかもそれが自由を本質とする都市国家において実現されていた。」（132ページ）

というようなことが気易くいえるのであろう。ナチスなりファシズムなり（いわんやそれ以上の「個人の自由に対する統制」が出て来るのは、都市からではなく国家からであろうし、その国家が都市と重なり合って「自由を本質とする」には、従来の（そして、羽仁五郎自身も恐らくそれに従っているであろう）定義とは全く別の定義が国家に与えられねばならないだろう。

いわゆる古代都市と中世都市の違いについては、アンリ・ピレンヌによっても、その『中世ヨーロッパ経済史』（増田他訳，一条書店，1956）で、端的に示されている。

「最初の市民階級は商業によって生活する人々によって専ら構成されていた…。」（54ページ）「商

業活動及び工業活動は……今や独立した職業となった。それらを行う人々は正に『新人』 (*hommes nouveaux*) である。」(56ページ)「…到るところで認められるのは、都市経済が現われると、それは自由の中に現われているということである。」(57ページ)

ポリスの住人が「新人」と呼ばれるにふさわしかったならば、中世の「商業部落」(*portus*) (53ページ)の人びとがあらためて「新人」と呼ばれることはなかったろう。新人は、旧人が住む空間とは異なった原理で立つ空間に住む。ピレンヌはいう。

「中世の市民は、都市の囲壁の外に住む人々すべてとは質的に異なる人間である。都市の城門や外濠を越えれば、他の世界、もっと正確に云えば、他の法律の領域に入るのである。」(70ページ)

こういう新人を古代のポリスに見出すのはむづかしい。そしてまた、同時代の南欧の、これまたしばしば「都市国家」と呼ばれているものに新人を見出すのも、古代のポリス程ではないにしても、やはりむづかしいだろう。なぜなら、ウェーバーが、ともに都市と呼んでいる南欧のそれと北欧のそれとの相違点を挙げているのを聞くと、南欧「都市」は同時代の北欧都市よりは、むしろ、時代を異にする古代ギリシア「都市」に近いと思わざるをえないからである。

「南欧では、騎士たちは大抵都市の内部に居住した。北欧では事情がまったく反対である。騎士たちは初めから都市外に居住を有するか、あるいはどしどし都市から駆逐されてしまった。」(206～7ページ) ヴェニスは「政治上ビザンティンの国家組織より独立したとはいえ、しかも海商ならびに海戦においては、なお依然としてビザンティン国家の一部を形成していた。」(186ページ)

騎士が都市に馴染めないのは、騎士が都市とは異質の法律に従うからである。都市に住みたければ、その人は騎士を廃業すればよい。勿論、都市が軍事と全く無縁でありえたわけではなかった。ウェーバーによれば、「その最初の時期における西洋の都市は何よりも先ず防衛団体 *Wehrverband* である」(182ページ)し、ピレンヌによれば、「中世においては、城塞市でない都市は存在しなかった。」(67ページ)なぜなら、「商人とその商品とは非常に誘惑的な餌食であったので、堅牢な囲壁を繞らせて掠奪者より防禦せざるを得なかった」(67ページ)からである。

しかし、軍事との関わり方で、都市と(都市らしいが都市でない)国家との間に決定的な相違があるであろう。この点についてのウェーバーの見解は説得性に欠けるように思われる。ウェーバーはいう。

「諸々の経営手段が労働者自身の所有に属するか、それとも資本主義的な企業者の専有に属するかは、明らかに社会史に対して根本的に重要であるが、しかしあたかもそれと同様に、軍隊組織の場合にあっても、武装自弁の原則 *Grundsatz der Selbstausrüstung* に立脚するか、それともある将帥が馬匹、兵器、兵糧を給与し、装備はこの将帥の負担において行われるという原則に立脚するか、ということが、社会史に根本的意義をもつ。」(182ページ)

ここで必要な限りの問題点を指摘すると次のようなことだ。(2)「自弁」の「自」は、どの範囲であろうとも、その範囲を「自」と定義すれば、それでよいことであり、「弁ずる」仕方も決して一様ではあるまい。軍事技術の態様も影響する。基本的には二つの場合がある。第一は、集団の成員が、時に応じて、みんな戦士になり、めいめいが自分の費用で、てんでばらばらに武装する場合である。第二は、集団の成員がみんな費用を負担するけれども、武装はそのなかの一部分の成員によってなされる場合である。ともに「武装自弁」といっておかしくない。それに対して、「武装他弁」があるとすれば、それは今日しばしば見られるように、外国からの武装援助を受けて成り立つ軍隊であろう。

(2) ウェーバーの考え方をおおざっぱに要約すると、西洋でのみ都市が成立し、市民が存在し、資本主義が発展したが、東洋にはそれらがいずれも欠けるということである。ところで、「王侯の軍隊（彼の云う武装自弁でない軍隊—友岡）が、都市があらわれる以前からすでに存在していたという事情、この事情が西洋以外のところでは都市の発達を阻害した」（182ページ）という所から明らかなように、「西洋—武装自弁—都市、東洋—武装他弁—非都市」という図式を構えているわけである。だが、おかしなことに、彼は（わたしが本文に引用した所で）「社会史に対して根本的に重要である」経営手段と武装についての負担方式の違いについては、「武装自弁—非資本主義、武装他弁—資本主義」の図式を構えている。

都市の武装と国家の武装の違いは、つまるところ、都市と国家の違いに帰するであろう。分り易い例を引けば、隊商の武装と山（海）賊の武装の違いに似る。隊商は他の隊商に対して武装するのではあるまい。つまり、隊商間には武装の理由はないだろう。山（海）賊は、他の山（海）賊に対して武装するであろう。勿論、隊商に対して武装するだろう。要するに、武装空間は、隊商対山（海）賊間、山（海）賊どうし間に成り立つが、隊商どうし間には成り立たない。ウェーバーは、ポリスについていみじくもいっている。

「古代都市民主政治は一種の政治的ツンフトである。なるほどそれは特定の営利関心を有し、しかもそれは独占化せられる。しかしその営利関心たるや、武力を利用する営利関心である。すなわち調貢とか、戦利品とか、あるいは聯盟都市の貢納とかは、市民でなければ分配を受けられぬという事情から生ずる軍事的営利関心である。……それゆえに慢性的戦争はギリシアの完全市民にとっては正常の状態であった。」（204ページ、力点は友岡）

わたしは、いつ知らずのうちに、都市と国家を異質のもの、むしろ正反対のものとして取り扱って来た。もし正反対のものであれば、「都市国家」という言葉は自家撞着していることになろう。「都市国家」という言葉が成り立つには、都市が国家に埋没するか、国家が都市に吸収されるか、いずれかの方法をとらなければならない。そのどちらか正しいかは、都市と国家のいずれが普遍性をもち得るかに帰するだろう。歴史的な見かけとしては、普遍性は国家の方に恵まれているようだ。果してそうであろうか。今度は国家を見よう。

2 あっても困りなくとも困る国家

周知のように、国家については、従来から、階級説的見解と公共説的見解とが対立し合っている。対立し合っているといったが、対立を意識しているのは、どちらかというところ、階級説的見解をもつ人びとのようである。彼らは、公共説的見解をブルジョア的見解と云ってしりぞける。だが、公共説的見解をもつ人びとは、階級説的見解をプロレタリアの見解という理由でしりぞけることはしないようだ。

階級説的見解は、階級（の発生及び存在）に国家（の発生及び存在）の原因を見ていると要約してよいであろう。もっとも、柴田高好のように、「国家発生＝本質論」はマルクス主義的国家論であって、それはエンゲルスに責任があり、マルクスが自分はマルクス主義者ではないと云ったことにならって、マルクスと同様に自分は別だというような人もいる。（『マルクス国家論入門』現代評論社、1973）わたしは、現代の「社会主義」が直面している様々の困った問題（そのなかで中ソ対立は最大）から、ひそかにマルクスを救い出そうと一所懸命のマルクス主義者をそこに見るだけである。スターリン批判が安全に行な

われははじめと、レーニン（エンゲルス、マルクス）は別だという見解が支配した。スターリンがレーニンと必ずしも無縁でないという具合にレーニンが安全のうちに問題にされはじめると、今度はエンゲルス（マルクス）は別だとなり、レーニンを通してスターリンがエンゲルスにつながるとなると、マルクス本人は全く別だということになるのであろう。柴田高好によると、肝心のマルクスの国家論は未完成なので、結局、マルクスは安泰というわけである。

わたし自身、「国家発生＝本質論」に基づいて、「原始社会における国家発生論から国家本質論をみちびき出す」（163～4ページ）気はさらさらないので、その点に関する限り、柴田高好に同感するのだが、「資本論における商品に対応するものは国家論においては人権だ」（123ページ）というのを聞くと、周知の「歴史と論理の照応」主義とどう関わるのか、よそごとながら気にかかる。いずれにせよ、階級説で国家を解明するのは、それなりに存在理由がないわけではないことに同意するけれども、国家が階級的に成り立ちながらも、とにかくこれまで人類とともに存在して来たということは（階級説による無国家社会を除いたとしても）階級説では説明できないだろう。別の云い方をすれば、国家が人びとにとって「なくては困る」という側面、すなわち公共説的見解を成り立たせる側面、柴田高好も認める国家理性、あるいは理性国家（77ページ）という言葉が使われるにふさわしい側面は、階級説では説明がつかないだろう。皮肉ないい方をすれば、マルクスがプロシア国家から追放されたことは説明ができて、マルクスがイギリス国家に迎え入れられたことは説明できないだろう。

国家論は階級説的見解で占領されているかの如き有様なので、そちらについつい筆が及びがちになるのは避けられないが、公共説的見解には階級説的見解をちょうど裏返しにしたような難点がある。公共的見解は、国家はその国民の誰にとっても必要であると説いている（ので、全体説的見解とも云える）わけだが、果して、これまでの国家がそのようなものとして存在していたのかということについては格別疑問に感じることはないようだ。誰にも必要であるなら、国家が目まぐるしく取り替えられた歴史は成り立ちようがあるまい。ある国家は自分たちにとって「あっては困る」と感ずる人びとがいるから、自分たちにとって「なくては困る」国家をもとうという動きが起り、そして国家の取り替えが起るのであろう。階級説的見解がそれなりに存在理由を与えられる国家の階級的構造は、公共説的見解では説明できない。別の云い方をするなら、理性国家に対する情緒国家などは、公共説の眼中には入らない。

このように、階級説的見解と公共説的見解とは、国家の認識については全く正反対である。階級説は国家の情緒的行動を説明できてもその理性的行動を説明できないし、公共説は国家の理性的行動を説明できてもその情緒的行動を説明できない。階級説は国家が交替する歴史を説明できても国家が一貫する歴史を説明できないし、公共説は国家が一貫する歴史を説明できても国家が交替する歴史を説明できない。階級説は国家悪を強調する余りに国家善を見逃し、公共説は国家善を信仰する余りに国家悪を無視する。

両説正反対であるけれども、互いに他の半面を見ないで、自説の根拠を弁えていないという点では同罪である。しかし、国家に関して強い関心をもち続け、国家悪のゆえに国家の死滅や廃止や揚棄を主張し続けて来たという理由で、道徳的には階級説の方が矢面に立たねばならないだろう。「社会主義国家」なるものが階級説の所産である現在では、階級

説はその矢面から逃れる術があるまい。彼らの心情的な意図に反して、「社会主義国家」こそが、少なくとも現在では、階級的国家の見本となっているのだ。これをひとえにスターリンのせいにしてしまうことができるものだろうか。

柴田高好は、スターリンの国家死滅論が（エンゲルス、レーニンの）国家死滅説を死滅せしめたと云う（330ページ）。そしてマルクスだけは何とか死守しようとする意気込みから、マルクスの国家論は（未完であるにもかかわらず）国家死滅論ではなく廃止論であると力説する（209ページ）。だが、依然として「プロレタリアート独裁」に固執するので、それでマルクスが救われるかどうか心細い限りだ。

プロレタリアートと簡単にいうが、誰がプロレタリアで誰がそうでないか（ブルジョアか）の区別が、男と女を見分けるように、あるいは犬と猿を見分けるように、簡単にできるわけのものではないだろう。結局、「プロレタリアート独裁」を主張する人びと（のなかの、それでそ言葉の意味通りの独裁者）が、お前はプロレタリアだ、お前はブルジョアだという具合に、恣意的に選別することになるだろう。こういうエンマ大王的な恐ろしい振舞いを肯定することなしには、プロレタリアート独裁は決して成り立つまい。（a）

（3）拙稿「雇用の構造」（九州経済学会「経済・経営研究」第11集，1973）を参照されたい。プロレタリアート独裁を主張する人びとに、いっぺん、プロレタリアとブルジョアを見分ける方法を是非教えてもらいたいものだ。何とはなしに、つまり、何の根拠もなしに、ブルジョアジーは「ひと握り」という先入観がある種の人びとを支配しているようだ。最近接した見本を一つ紹介しておく。

毎日新聞の「この人と」というシリーズ（73. 9. 1）に登場した日本社会党委員長成田知巳はいう。「いまはやはり、ブルジョア独裁ですよ。日本の政治経済を握っているのはごく少数の、国民のうちの1%か2%の独占、それを代表している政治勢力の自民党だ。『社会主義の社会になればそれが逆になって国民の99%が政治の主権者になるんだ……』というのが向坂さんの考え方じゃないかと思えますね。」わたしがどっちに入れられているのか聞いておきたい所ではある。

階級説と公共説とが、それぞれそれなりの存在理由をもつことは否めないが、しかしそのままだではすれ違ふことも確かである。ひとつの国家が、ひとりにとって、あるいはみんなにとって、同時に階級的でありかつ公共的であるということは背理である。「階級的である」とは、支配階級のもの、したがって国民の部分のものであることを、「公共的である」とは、階級を越えた国民の全体のものであることを、それぞれ意味することは明らかである。わたしには、階級説が国家から除け者にされている部分（的な人びと）の存在という現実を告発しており、公共説が国家から除け者にされる部分（的な人びと）の存在などあってはならないというビジョンを語っているようにも感じられる。しかし、そうであれば、両説は折合うであろう。実際には、わたしの見るところ、階級説は国家の本来的な在り方について、公共説は国家の現実的な在り方について、それぞれ盲目である。結果において、国家の階級的構造という現実の側面を肯定する役割を果たしている。

両説のそれぞれの存在理由を評価し、両説の誤まった結果を回避する方法はないものだろうか。ある。それは次のように考えることだ。

両説それぞれの立論の前提は異なる。階級説的見解が成り立つには、国家は閉鎖されているという前提が必要である。階級説者は、自分たちの立論の前提を自覚していない。他方、公共説的見解が成り立つには、国家は開放されているという前提が必要である。公共

説者もまた、自分たちの立論の前提を自覚していない。ひとつの国家があるとする。当然国民がいる。その国民のある部分（的人びと）にとって、その国家はあっては困る仕方で存在する。それなら、その国家から脱け出せばよいではないか。それが可能なら、そういう部分（的な人びと）は存在しない。こういう部分（的な人びと）が被支配階級である。言葉をかえれば、めいめいの意志に反してある国家に所属させられ、自分たちの国家を喪失している人びとの集合が被支配階級である。他方、その国民の他の部分（の人びと）にとって、その国家はなくては困る仕方で存在する。こういう部分（的な人びと）が、階級説者のいう支配階級である。言葉をかえれば、めいめいの選択の結果として国家に所属している（と感じられる）人びとの集合が支配階級である。（もっとも、被支配階級にふくめられる人びとは、自分の「被支配」を感じるだろうが、支配階級にふくめられる人びとは、前者に比べると、自分の「支配」を感じていないかも知れない。）その国家があっては困ると感じる人びとにとって、その国家は階級的であり、ここに階級説の存在理由がある。他方、その国家がなくては困ると感じる人びとにとって、その国家は公共的であり、ここに公共説の存在理由がある。マルクスにとって、プロシア国家はあっては困る（と感じられた）国家であり、イギリス国家はなくては困る（と感じられた）国家であっただろう。そのマルクスにとって、現在の「社会主義国家」がなくては困る国家でありうるかは疑わしい。

国家なるものの一貫した存在と、その度たびの交替の歴史も、以上のことから簡単に説明がつく。ある国家が、それはあって困ると人びとに思われる仕方で存在すると、そう思う人びとがその国家をくつがえそうとする革命派となるだろう。革命というのは、自分たちの国家を喪失させられている人びとが自分たちの国家を獲得しようとする試みであるといえる。その限りでは革命は支持されうる。だが、これまでの革命のすべては、新たな国家喪失者をつくり出す仕方で試みられた。自分たちの国家を獲得することは結構なことには違いないが、そのことによって自分たちの国家を喪失する人びとの存在は無視されたのである。プロレタリア革命も例外ではない。それは最後の革命とさえいわれるけれども、革命を革命する（得意の弁証法をもってすれば、否定を否定する）ことはできなかった。こうして、自分たちの立論の前提を自覚しないまま、現実的なものを本来的なものと見誤る公共説に事実上転ずるのだ。「全人民国家」とひとこといわれたのがそれである。階級説に対立する限りの公共説は、国家悪が見えなかったのだが、階級説が転じた公共説は、国家悪を国家善に読み替える。純粹公共説者の心のうちでは国家は開放された存在であっただろうが、転向階級説者の心のうちには国家開放の影が宿る隙間もなさそうである。

これまで存在した国家は閉鎖的であろうとしながら開放的であることも余儀なくされた仕方で存在していた。もし完全に閉鎖された存在であるなら、その国家はそのまま世界である。ひとつの国家がそのまま世界であることが擬制にしか過ぎないから、閉鎖に破れ目が生じざるを得ない。この開放への衝動は何に由来するのであろうか。わたしは、ここに都市という空間の息づきを感じるのだ。

3 見えない都市と見える都市

中世にピレンヌのいう「商業部落」が新しい原理に立って現われた時、人びとは、そこ

の住民を「市民階級」と呼んだ。しかし、この「階級」が、「旧人」たちの身分と結びついた階級と全く異質であるのは明らかであろう。「市民階級」は、ウェーバーによれば、「富裕なる市民も貧小なる市民も、企業者も手工業者も、みな同じように市民階級に数えられる」（前掲書、173ページ）のであって、それは（便宜的に言えば）領主階級と農奴階級とをふくむ「旧人」集合に対応するレベルにある。つまり、「市民階級」は、（多分それを表現するにふさわしい言葉がなかったので）言葉こそ「階級」と表現されているけれども、その実、階級を越えた存在であった。

階級を越えた新しい存在が、階級にとらわれた旧い存在から抜け出して現われ、両者相争いながら、そしてまた相補ない合いながら、存続することで変容していった歴史は、都市と国家との因縁の関係が織りなすドラマである。ある状況では都市と国家は相容れず、ある状況では都市と国家は相容れる。ピレンヌはいう。

「市民階級の主要な特徴は、実際、その他の人口の真中で一特権階級を構成しているということである。……市民は、現職者と同じくまた貴族と同じく、普通法の適用を受けない。彼等と同じく、市民は特殊な階級（*status*）に属するので、後年第三階級という名称のもとに呼称されたのがそれである。」（70ページ）

市民は、本来、「新人」と呼ばれる限りでは、「旧人」がそれぞれの身分に応じてもつ（プラス・マイナスの）特権からドロップ・アウトしたそれこそ身分外の人びとであったはずである。この市民が、第一、第二に続く第三の階級として、旧人の序列に加わり行くには、二つの事情が働いていよう。第一は、旧人にとっても、都市がなくては困るということ、第二は、新人にとっても国家がなくては困るということである。そこで両者の妥協が成り立つ。勿論、妥協が成り立った状況においては、新人がそこから脱け出した旧人の序列とはかなり変ったそれなりに新しい序列が形成されているだろう。こうして、ピレンヌによれば、

「農村の人々については、市民階級は彼等を搾取の対象としてしか考えないのである。都市の特権を彼らにも享受させてやろうとするどころか、都市は常にそれを頑強に拒否した。」（71ページ）

都市が国家を必要とするなら、自分たちの国家を、すなわち、旧人の国家とは異質の独自の国家を、都市を損なわないように、それぞれもてばよいだろう。その時、名実ともに備わった都市国家が生れるだろう。その都市国家は、勿論「自由を本質とする」（羽仁五郎）ので、開放されていなければならない。だが、そうはならず、中世の諸都市は、まるまるというわけではなく、なおそれぞれの独自性をかなりの程度維持しながらではあるが、より大なる閉鎖的であることを志向する国家の構成部分になり行く。

中世の諸都市がそれぞれ独自の国家になりえなかった理由は何であろうか。その理由は、中世諸都市の発生そして形成に当って重要な役割を果たしたギルドやツンフト自体にひそんでいたように思われる。ウェーバーによれば、

「中世都市がツンフトの支配下にいとなんだ政策……の目的は何か。第一に先祖伝来の生業機会および営利機会を確保すること、第二に、通常には罰令権と市場強制とによって周囲の農村を営利関心のために利用せんとしたこと、これである。更にこの政策は競争を阻止し、また大企業への発展を防遏しようとつとめた。」（前掲書、198ページ）

「先祖伝来」の身分的制約という差別的な条件から脱出したのが都市住民、すなわち市民であった。その点で、都市は、それがそこから脱出した、そしてそれを取り囲む封建的国家とは異質である。だが、そういう諸都市がそれらを取り囲む国家の部分となり、それぞれ

の市民が国民の一部分となり行くには、両方に共通する要素、同質的側面があるからに違いない。その同質的側面は、封建国家から都市へ脱出する人びとに対してよりも、封建的国家に留まることになお利益を見出している人びとに対して、都市の人びとにより強い共感を抱かせるようなものであるだろう。それは何か。一言で云えば、「先祖伝来」すなわち世襲制度である。旧人は身分を世襲的に相続する。新人は財産を世襲的に相続する。世襲する単位は、いうまでもなく、同族（家族複合体）である。旧人においては身分の相続が身分に伴う財産の相続をもたらし、新人においては財産の相続が財産にふさわしい身分の相続をもたらし。もっとも、身分は政治的身分から経済的身分へ（今様に云えば、政府での身分から企業での身分へ）より傾斜しているであろう。都市を取り囲む国家には国家で、自分の体内から脱出してその外部に姿を現わした都市を必要とする事情があった。都市が体外に姿を見せるまでは、国家の体内に、したがって見えない状態で、都市が巣くっていたのだ。都市が体外に見える存在として現われ、ひとり歩きしはじめて、国家（に留まることで利益を感じている人びと、なにかなく封建的領主グループ）は、国家とは異質の都市なしには存立することさえ危ういことを感ずることができた。

国家が都市を必要とする事情は何であろうか。そして、目に見えない都市とは何であろうか。「元来市場と都市は同時に発展したのである」と、建築家 L・ヒルベルザイマーは『都市の本質』（渡辺明次訳、彰国社、1970、107ページ）で適切にもいっている。ここで都市起源論に触れるいとまはないが、都市と市場の因縁浅からぬ関係は広く知られており珍らしくはない。市場は目に見えない。市場は目に見える。見えない都市と見える都市の違いは、この市場と市場の違いに重ね合わされるだろう。国家が都市を必要とするとは、つまり、市場を必要とすることに外ならぬ。

見えない都市は、国家がいかにおのれを閉鎖しようが、決して閉鎖し切れるものではないということ、別のいい方をすれば、どんな国家も単独に存在できたためしがないという事実によって、その存在が証明される。今では、自分たちが所属する、あるいは所属させられている国家が単独で存在できているなど信じている人びとは少ないに違いないが、しかし、そのことは人びとがずっと馴染んで来た伝統的観念から解放されていることを意味するものではないだろう。そうでなければ、帝国主義というイデオロギー（やそれに裏打ちされた行動）が存在しているはずはない。帝国主義は閉鎖を信条とする国家の在り方から発生するものだが、国家に関する事柄にとどまらず、それはいろんな分野に現われる。それらには共通するパターンがある。部分をもって全体を掩い、特殊をもって一般に代え、個別をもって普遍を唱えることである。国家に関する階級説も公共説もそういうパターンから免れ得ていない。一方を階級を、他方は公共を押し売っている。そういうことが分っていないものだから、しばしば、帝国主義に反対するのに帝国主義をもってする自己矛盾を犯す人びとが現われる。

ひとつの国家が単独に存在しようとするれば、それは二つの方法のいずれかを採ることによってである。第一の方法は、（これがふつう帝国主義として理解されているのだが、）自分たちの国家を他国を併呑することで拡大して、自分たちの国家で世界を掩うことである。第二の方法は、（これはふつう帝国主義として理解されていないのだが、）自分たちの国家を他の諸国家から遮断して、自分たちの国家だけでひとつの世界を築くことである。いわゆる鎖国である。わたしは、かつて、前者を外向的帝国主義、後者を内向的帝国主義

と呼んだことがあった。（「南北問題解決は国家体制廃棄で」世連研究, 31号, 1969.6）外向きか内向きかの違いはあれ、ともに自分たちの国家を世界に擬制することを志向している。この共通性のゆえに、二つの方法は、時に応じて選ばれ、そしてまた、裏表をなすことがある。外向きのときには、その外にいる人たちが迷惑し、内向きのときには、その内にいる人たちが迷惑する。迷惑する人たちが植民地住民である。外向帝国主義には外部植民地が、内向帝国主義には内部植民地がつきものである。植民地の人たちは、いわば他人の国家を押しつけられており、自分たちの国家を喪失している。こういう帝国主義が成功することはありえないのを今さら説明するまでもあるまい。志向することとは関わりなく、所詮、どんな国家も市場を通しての世界という自給自足大系の部分的な結節でしかありえない。帝国主義は市場を拒否し、そして市場によって罰せられるのだ。どんな国家もひとつの世界たりえないことは、どんな国家も、目に見えたと見えないとに関わらず、市場を、したがってまた市場の空間的表現たる都市を体内に装置しておかねばならぬことを意味する。ひとつの国家自体が、目にもあらわなひとつの都市であったことはいまだなかったとしても、一定の場所に定着しているかないか、あるいは常時的に従事するのか一時的に従事するのかを問わず、都市的機能を果す商人の存在は欠かせなかった。

いかに閉鎖しようとも閉鎖しきれるものではなく、いずれ何らかの程度で開放しなければならないという国家のかくされた裏面こそ都市そのものの舞台である。都市が空間化された市場であるという意味で、都市には人と物が自由に出入する。すでに指摘したように、ある国家を、それがなくては困ると思える人びとは、いわばその国家を選択しているのであり、彼らにとってその国家が公共的に存在することは、その国家がそのまま彼らにとって都市であることを意味する。だが、彼らにはそれがなくては困るのと同じ国家が別の人びとにとってあっては困るものである以上、その別の人びとにとってその国家は都市ではなく、もし都市に対する言葉としての村落という言葉を使うとするならば、村落にこそ外ならぬだろう。あらゆる人びとにとってそれがなくては困ると思われる仕方では国家が存在すれば、その時、その国家はそのまま都市であるだろうし、その場合には、その国家は誰にとっても選択されるものとして、すなわち出入自在の開放されたものとして存在するだろう。それに属することに我慢がならない人びとは、その国家の外にいるだろうからである。これまで「都市国家」と呼ばれて来たものにそういう条件を備えたものが見当らなかったことをわたしはすでに指摘して来た。中世の北歐諸都市も、再び閉鎖的であることを志向する国家にからみとられていった。「都市の空気は自由にする」という有名な諺にいわれている「自由」が、当時の市民の眼で見れば、ピレヌがいみじくもいうように「有用な権利にすぎない」（前掲書, 64ページ）ものであったということに、からみとられていかざるを得ない中世諸都市の悲しい性が読みとれはしないであろうか。中世諸都市の「自由」は、自分の自由が他人の不自由によって値打ちが高まるようなものであった。その本当の名は特権である。そういうブルジョア的自由に対置するにプロレタリア的自由をもってするならば、その名称は何であれ、自分の自由が他人の自由によって値打ちが高まるような自由でなければならない。不幸にして、プロレタリア的自由は、ブルジョア的自由の方がまだましだと思わせられるような仕方では世に現われたのだった。ソルジュニーツィンの『煉獄の中で』には、プロレタリア的自由の赤裸々な状態がものの見事に描き出されている。収容所の外にいる「自由」な人びとも、実はソビエト国家という一大収容所の内に

閉じ込められている囚人でしかなかった。

多くの人びとによって、近代社会は市民社会といわれる。市民社会の「市民」はどういう存在であったか。日高六郎は「＜市民＞の閉鎖性と開放性」（『市民と市民運動』岩波講座『現代都市政策』2巻46ページ以下、1973）について語っている。わたしなりに翻訳すると、市民の開放性は「自分の自由」に、市民の閉鎖性は「他人の不自由」に対応するであろう。あるいはまた、先に説明した所と関連させて、市民の開放性は「身分の世襲相続制度」からの解放に、市民の閉鎖性は「財産の世襲相続制度」への拘束に、それぞれ対応するであろう。財産の世襲相続制度は、ふつう私有財産制度と呼ばれていることで、ブルジョア社会の基本的制限要因をなしていることが案外見逃されている。わたしはかつて「経済学における私有財産の問題」（鹿児島県立短期大学商経学会「商経論叢」第15号、1966）でそのことを論じた。残念ながら、「私有財産制度」という言葉が、本来公のものである財産（生産財）を同族内で継続的に横領することを認めるという忌むべき内容をもつ「財産世襲相続制度」を打ち消す役割を果たしていることに、まだ人びとは気づいていない。そのために、人びとが否定しようとする「私有財産制度」は依然として無傷であるばかりか、否定の結果としての「社会主義」は、むしろ、いっそう悪質な「私有財産制度」に逆戻りさえしている。

財産世襲相続制度という閉鎖要因が保存されることで、中世の諸都市には「都市貴族」という自家撞着的な存在が出現する。かつて騎士を追い出した都市が今度は貴族をかかえ込んだのだ。「ツunft闘争」と呼ばれる衝突が既存のギルドと新しい都市流入者との間に、特に商業と手工業ギルドの間に、世襲的に相続される様々の既得権をめぐる展開した。既得権を守る集団の閉鎖性が強ければ、そういう集団に支配される都市からの逆脱出が起らざるを得ない。結果的には、その逆脱出口が封建主義の稀薄な辺境地域に新たな産業を興し、いわゆる市民革命の源泉となった。こうして生れた市民社会がマルクスによって古い市民社会と意識された理由はすでに明らかであろう。しかし、マルクスもまた財産世襲制度を私有財産制度としてしか認識できなかったことが災いして、古い市民社会に代る新しい市民社会、別のいい方をすれば、特殊な市民社会に代る普遍的市民社会を思い浮かべることに必ずしも成功しなかった。古い市民社会はなお閉鎖に固執する国家を必要とする。新しい市民社会が必要とする国家は開放されたものであり、したがって、従来の国家という言葉をもそのまま使うことを許さなければ、都市あるいは自治体と呼ぶ外ないものである。市民革命、すなわちブルジョア革命は古い市民社会を建設するものであった。プロレタリア革命と名づけられている革命がブルジョア革命の肯定的側面を受け継ぎ、否定的側面を克服する革命であるとするなら、それは城寨に自分たちを閉じ込めている市民を世界に向かって開かせること、すなわち世界市民という名実ともに普遍的市民を生み出すことを課題としなければならなかったのだ。現代の「社会主義」国民が、普遍的市民であるどころか、むしろ特殊な市民であることから後退しているという現実には、マルクス（主義）の願望（人間解放）と認識の悲劇的なギャップの結末を見ることが出来る。しかし、見えないところで都市は息づいている。1968年のプラハ、そして現在のサミイズダート、そしてサハロフに代表されるいわゆる「反体制派知識人」等にそれを感じとらねばならないだろう。

見えない都市が存在するからといって、都市が見えない状態で存在し続けることが肯定

されているわけではない。都市は目にもあらわに見える存在にならねばならない。それでは、都市はどういう状態で見えるようになるのであろうか。そして、今日、人びとによって固有名詞づきで呼ばれている都市とそれはどう違うのであろうか。これを次に考えよう。

4 国家のなかの都市から都市のなかの国家へ

日本では、「都市」といえば「市町村」の「市」を指している。都市人口は、「市部」人口である。「市」は地方自治法（第8条）によって「人口5万以上」および「商工業その他の都市的業務に従事する者及びその者と同一世帯に属する者の数が、全人口の6割以上」という二つの条件を備えるものとされている。ここで「都市的業務」といわれているのが、農業、林業、水産業以外のものであるのは明らかであろう。

都市は、これまで、農村に対置されて来た。経済学は、都市と農村の分業を論じ、社会学は都市・農村二分法を立てた。こういう通念に果して問題は残されていないのだろうか。

素朴な疑問を出すことから始めよう。「農村」は「（主として）農業を営む人びと（およびその家族）が住む村落」の謂であろう。だが、都市に対置される限りの農村には、林業や水産業を営む人びと（およびその家族）が住む村落もふくまれているものだ。人口数は少なくとも、独自に林村や漁村と云ってよさそうなものである。もっとも漁村という言葉はあるが、林村という言葉はなく、それに代るものとして山村という言葉が使われている。そういうものがふくまれているのだから、農村という言葉は農山漁村の省略形ともいえる。だが、林業や漁業が農業に一括代表されねばならぬ理論的根拠は何もない⁽⁴⁾。経済統計や社会統計の類が、いずれも、農業、林業および水産業を区別し、一括して第一次産業と呼んでいるのは周知のことである。

(4) 部分をもって全体を掩う悪しき慣習のひとつがここにもある。「朕が国家なり」という類である。わたしは「良貨が悪貨を駆逐する」（本誌第22号、1973）で、「代表性ジレンマ」ということについて語った。ひとつの国民通貨（ドル）が万国通貨である（とされたりする）ことや、ひとつの商品（金）が貨幣である（とされたりする）ことや、ひとつの国語が万国共通語である（とされたりする）ことなどに共通するジレンマである。勿論ひとつの国をもって世界に擬する帝国主義も例外ではない。プロレタリアートに普遍性を見出し、マルクス主義の名で科学を語ることなども同じパターンである。この点については、別の観点から「論述あいまいの虚偽」を衝いている堀江忠男「マルクス主義における弁証法とは何か⁽⁵⁾」（早稲田政治経済学雑誌第233号、1973. 2）を参照されたい。

なぜ、林業や水産業をひっくるめての農村を都市と対置する慣行が生じたのであろうか。察するに、城壁をはさんで向き合う中世都市とその外部空間の見かけ上の区別に眩惑されたからであろう。なる程、中世都市の住民は商工業者（およびその家族）であった。彼らの生産と消費に必要な原材料・食糧は、おおむね、その城壁外の「農村」から供給された。だが、注意しなければならないのは、その「農村」という言葉にふくまれる「農業」は、今日的な意味における農業ではなく、「都市的業務」と称されている商業や工業等がなお色濃く附着している農業であったことである。都市に商工業が集中したからといって、都市外空間に商工業が途絶えたわけでは決してない。封建主義は「農業」を基本にするとい

う通念は半分正しく半分誤まっている。

こういうことは何を意味するであろうか。商業や工業が、農業に比べて、都市に馴染み易いとはいっても、だからといって、商業や工業や都市外空間に決して馴染めないことを意味するわけではないだろう。同様に、農業が商業や工業に比べて、都市空間に馴染み易いとはいっても、そのことは農業が都市に決して馴染めないことを意味するものではあるまい。つまり、都市と都市外空間を区別するものとして、産業や業務等は決定的な基準になりえないのだ。そうであれば、農業という特殊な産業を冠した「農村」を都市に対置することはむしろ無用の誤解を招くだけであるので、産業の種類とは無関係な「村落」という言葉をそれに代えるのが理に適うであろう。

J・ジェコブスは『都市の原理』（中江・加賀谷訳、鹿島出版会、1971）で、農業（農村）の発展から工業（都市）が出現したという見解を（通説として）しりぞけ、「初めに都市ありき——そして農村が発展する」という見解を語っている。この見解の可否は措いて、彼女が説くところには共感を誘うものがある。

「まだ農耕が始まる前、狩猟以外のことをしていた人間もたくさんいた…。そういう人間は製造業者だったし、大工…、交易人…、芸術家だった。大量でしかもいろいろな種類の武器、衣服、はち、建物、首飾り、壁画、彫像を作った。石、骨、木、レザー、毛皮、藁草、粘土、材木、アダービルレンガ、黒曜石、銅、鋳物顔料、歯、貝殻、琥珀、つのを工芸の原料として作った。」（53～54ページ）

彼女の見解を、いわゆる「都市的業務」なるものがいっぱい村落で営まれていたというように解釈すれば、十分に納得できるだろう。彼女は、また、アダム・スミスに触れて、スミスが

「都市と農業の間に、今日われわれが観察できるのと同じ関係を見出した。当時最も高度に農業が発達している国は、きまって工業と商業の最も発達している国であると報告した。」（50ページ）
 といっている。このことは、農業国と工業国という常識的な区別の弱点を衝くものだ。スミスは今日のアメリカを観察しているかのようだ。

産業の種類が都市と村落にとって決定的な区別の基準とはならないとすれば、両者は何で区別されるのであろうか。都市と国家についてすでに論じて来たところを振り返ると、及その見当をつけることができよう。国家が産業の種類や人口の多寡で資格を問われたことはない。中世の諸都市の多くは、人口の規模で今日の日本の「市」の法定水準にはるかに及ばなかった。ポリスは都市というよりはむしろ村落、大きな集住村落であった。だから、ポリスは「都市国家」というよりは「村落国家」という方がはるかにふさわしかったのだ。一村一国家というわけだ。村落は、しばしば「村落共同体」と呼ばれて来た。国家も、共同体の観点からしばしば論じられて来た。そういう意味で、村落は国家のミニチュア版である。

共同体については、わたしはずっと以前に、「共同体ということ」（九州経済学会「経済・経営研究」第1集、1963）で論じたことがある。ドイツ語で共同体を表わす *Gemeinde* は、*Gemeinschaft* という社会構成原理に基づく単位であるけれども、他方の社会構成原理である *Gesellschaft* には、その原理に基づく単位が見当たらない。*Gemeinschaft* は閉鎖原理であるから、閉鎖されたまとまりを表わす言葉をもつものに対して、*Gesellschaft* は開放原理であるから、まとまりを表わす言葉をもたないのだ。強いていえば、数学用語を借りて、閉集合と開集合ということになろうか。前者は実線で囲まれた集合、後者は点線で囲まれた集合で視覚化されよう。数学の例にならって、新しく、例えば、*Gesellde* と

という言葉をつくるのが便利かも知れない。日本語ならば、共同体に対して自治体という言葉を使うのがよからう。勿論、ドイツ語には自治体を表わす *Selbstverwaltungskörper* というのがある。

人びとのそれへの帰属が選択的か非選択的かの違いで、共同体と自治体が区別される。ここで選択的というのは、それへの「入」とそれからの「出」が、全く自分の意志で行なわれることである。勿論、出入に関して条件があって当然だが、その条件が誰に対しても無差別であることが前提されている。出入の条件に差別があると、非選択になる。すなわち、選択的というのは、それへの「入」とそれからの「出」が、自分の意志とは無関係の力で決定されることである。基本的には、宿命的要素と強制的要素の力が考えられる。前者は生れつきによって「入」を、死によって「出」を決定づけ、後者は拉致によって「入」を、追放によって「出」を決定づける。選択性の有無と出入とを結びつけると、出入とも選択的、出は選択的だが入は非選択的、出は非選択的だが入は選択的、出入ともに非選択的の4型が分類される。何が望ましいかはいうまでもない。現実存在する様々の集団、団体、組織、等々名称は何であれ、ともかく集合として概念されるものにそれを当てはめてみるのも興味あることだが、今はこれ以上立ち入らないでおく。

「自治」という言葉は、これまで集合への「入」と集合からの「出」の状態が考慮されることなく使われて来たように思われる。それは「共同体」についても同様であるので、例えば、「都市共同体」というような言葉が何のためらいもなく使われる。鯖田豊之は、プラーニッツ Hans Planitz の『中世都市論』（未来社1959）で、プラーニッツが中世都市の形成に決定的役割を果たしたとしている *Eidgenossenschaft* を「宣誓共同体」と訳している。宣誓仲間団体、あるいは盟友団体とでも訳すべきであろう。もっとも、プラーニッツ自身 *Stadtgemeinde* という言葉を使っている。非選択的にそれへの帰属が決定される場合、すでに基本的人権が奪われているわけだから、そういう集合に自治が法り立つはずのないことは明白であろう。勿論、たとえ非選択的な事情で帰属が決定されたとしても、いま現にそれに満足している人びとがいれば（必ずいるであろう）、そういう人びとにとってはその集合が自治体の意味をもつだろう。こういう満足集合に対して不満集合があれば（これまた必ずあるであろう）、両集合に対して支配階級と被支配階級、イン・ロウとアウト・ロウ、主流と副流＝反主流、体制派と反体制派、等々、それぞれのニュアンスの違いに応じた言葉が用いられるわけである。

自治体については、わたしをもふくめて、多くの人びとが無関心であり過ぎたように思われる。そういう状況のなかで、先に引用した羽仁五郎が「自治体の復権」を主張した功績を特筆しておかねばならない。「都市問題」誌（東京市政調査会、1972. 1）は「自治体の自主決定権」を特集した。浪江虔はこのなかの「自治体の自主決定権をめぐる」で、その無関心状況を、次のような例で語っている。数多くの年表の類からは「地方自治法」の項目が欠落している。地方自治法ができた年（1947）を知っている人は極く稀である。わたしも、その例にならって、いくつかの辞典に当たって見たところ、「自治体」という項目さえないか、あっても役にも立たない説明でお茶を濁されているのを知って驚いた。「自治の機能を認められた公の団体。『公共団体』というのと同じ」という国語辞典まがいの『新法律学辞典』（有斐閣、1961、初版は1952.）があった。興味をそそられたのは、『現代用語の基礎知識』（1971年版、自由国民社）の「自治町村」の項目である。「町村合併にと

ことんまで反対し、反対派だけで『自治町』『自治村』をつくったところで、たとえば山形県の『湯野浜自治町』や宮城県の『利府自治村』などがそれである。これら自治町村は政府の認めたものでないから行政地区とはならず、戸籍から税金の処理まですべて独自の立場でやった。町村合併にからんだ一つの珍現象であった。」この項目は1973年版からは消えている(『湯野浜自治町』は現鶴岡市内に、『利府自治村』は現宮城郡利府町にふくまれるか)。浪江虔は次のように評価している。

「近頃ではさすがに市民参加の思想はかなり浸透しはじめたが、自分たちで自治体をつくるという考えは、今もってほとんどない。百歩譲って、むりに合併させられた自治体が、分離独立しようとしている例をさがしてもごく稀でありその稀な例でさえ、国家権力に対する抵抗や闘争によるのではなく、地域エゴイズムの衝突が主因である。」(78ページ)

わたしは、こういう評価に素直に従えない。「地域エゴイズム」で何が悪いと平き直りたくなる。「自治町村」は、確かに町村合併の過程で生じた摩擦的な「珍現象」であったにしても、ともかくそれがあってそれをふくんでいた国家の「政府の認めたものでないから、(国家の)行政地区とはならない」ので、それ自体が独自の国家であるとさえいえるのだ。

自治は、自律、自主、自決および自立の四要素で成り立つであろう。自律とは、集合のメンバーが従う法律をメンバー自体が決めること、いいかえれば、法律に従うことに同意する者のみがメンバーであることである。自主は、集合の長(首長、市長、会長、団長、等々名称は何であれ)が当該集合のメンバーによって決められること、いいかえれば、当該集合以外から出る力によって長が押しつけられることがないことである。自決とは、当該集合が他の集合と連合するか否かの決定権をもつことである。自立とは、当該集合の経済的独立、いいかえれば、当該集合の政府財政が他に依存しないことである。この自立に関しては、諸集合の連合体がつくられて、そこで財政の部分的移転が行なわれることを否むものではない。

今日のいわゆる「地方自治体」は、昔日の比ではないにしても、なお自治体としての諸要素を満たしてはいない。自律の面で、自決の面で、そして自立の面で、なお依然として、かってそれらがその中に完全にとらわれていた国家に制約されている。そういう意味で言葉の意味通りの都市は存在しないといってよい。地方自治体なるものは、国家という一大村落のなかになお閉じ込められていて、不完全な呼吸にあえいでいる都市の姿である。

「日本列島の都市化」は、「地方自治体」から「地方」が脱ぎ捨てられ、それぞれが対等の地域自治体となることで完成される。それが「市」であれ、「町」であれ、あるいは「村」であれ、そういう名称に関係なく、自治体こそ都市であり、そしてまた都市こそ自治体である。そういう場合に、はじめて、市民と国民とが矛盾のない言葉になる。言葉をかえれば、都市と国家の矛盾が消える。

む す び

理論は——それが何に関するものであれ——矛盾を受めるのではなく、矛盾を嫌うものであろう。しかし、「社会科学」という分野では、反対に、積極的に矛盾を受めることが科学であるかの如き振舞いをする一群の人びとがあり、それなりに「進歩」の役割を果たして

来たことのために、そういう風潮が根強く広まっている。わたしも、かつて、何の疑問も抱かずに、その風潮に色濃く染まっていた。その根本的な欠陥は、現実の矛盾と理論の矛盾の混同である。しかし、それを自覚してさえ、その混同を避けるのはむづかしい。その理由のうち、大なるもののひとつは「言葉」である。

言葉は現実を写すので、現実の矛盾を背負い込んでいる。理論は、矛盾を背負い込んだ言葉を用いなければならない。このことのために、ひとつ言葉が反対の意味で使われるようになったり、広狭の意味を取り違えて使われたりする。頼りになるのは「文脈」ということになる。文脈が、それを読む人に共通の認識を与えるならばいいのだが、結局は、「行間を読み」ということになる。行間の読み方は一様でないので、読む人毎に違った認識を抱くわけだ。

かつて、スウィージーは、共産主義だったか社会主義だったかがすでに手垢に汚れているといったことがあったと思うが、そのことは、殆どどの用語に当てはまるように思われる。それに突き当たる度に、わたしは、それこそ言葉を失うのだ。仕方なく、カッコづきでその手垢に汚れた言葉を使うことになる。その度毎の心理的いらだちはたえようもない。手垢を感じないで、既成の用語を平気で使う人びとの無神経さが羨ましくさえある。

都市と国家もそういう類の言葉である。したがって、それこそ考えよう次第で、都市と国家は、「都市国家」という言葉が広く使われている如く、何の矛盾もなく両立する。それに抵抗を感じない人びとにとっては、国家に幽閉された都市など考え及びもつかないことなのだ。そのとき、彼らからは、「都市の空気は自由にする」という格言の意味は飛び去ってしまう。そうでなければ、逆に、「国家の空気は自由にする」で、国家が弁護されることになるだろう。都市と国家は両立しない。したがって、「都市国家」は自家撞善的な言葉である。だが、国家が、それにふくまれる公共性を、国民の一部分の人びとに対してだけではなく、その全部に対して開放するなら、言葉をかえていえば、国家がそれこそ公共的なものになるなら、都市と国家は両立し、したがって、「都市国家」は、むしろ、同義反復的な言葉になる。以上のことから、従来使われて来た「都市国家」は、「国家に幽閉された都市」のことであり、わたしがいう「都市国家」は、反対に、「都市に幽閉された国家」のことであると区別できるだろう。

勿論、それは理論型ともいえるべきものであって、現実（過去および現在）には、種々の段階の中間的なものが見られるだろう。どちらかというところ、「資本主義」では、国家がかなりの程度都市に制約されているのに対して、「社会主義」では、反対に都市が大いに国家に閉じ込められていると見られる。共産主義が、国家の都市への幽閉を意味するとしたら、何と、「社会主義」よりも「資本主義」の方こそ共産主義に近いことになる？ それこそ通念に真っ向から衝突する。残念なことに、現在の「社会主義」には、国民はあっても市民は存在していないようだ。（1973.10. 8）